

《論説》

高校生非行に対する計量的説明のための統合 理論の有効性：英米非行理論の検証

西 村 春 夫

目 次

序

I 犯罪非行についての統合理論

1. はじめに
2. 犯罪非行理論の統合の歴史
3. 統合理論の概要
 - ①差異的予期理論
 - ②エリオットの統合理論
 - ③社会的発達理論
 - ④経済的獲得手段理論
 - ⑤犯罪と人間性
 - ⑥相互作用の理論
 - ⑦神経学的媒介による遺伝と環境の相互作用
 - ⑧統合的構造マルクス主義理論

II 統合モデルによる非行の説明：日本のデータによる検証

1. 目的
2. 方法
 - a. オリジナルな調査の企画，調査票
 - b. 今回の再分析の企画
 - c. 第1次解析のための理論的変数の作成，理論の計量化
 - d. 第2次解析のための理論変数の作成，理論変数の圧縮
 - e. 従属変数の作成，非行度の計測
 - f. 対象サンプル
 - g. 実施法，実施時期
 - h. 統計分析の方法
3. 結果と考察

- A. 4 タイプの非行間の相関度
 - B. 第2次解析の理論変数間の相関
 - C. 18個の変数による第1次の重回帰分析
 - ①重回帰分析の方法
 - ②結果の全体的所見
 - D. 7個の変数による第2次の重回帰分析
 - E. パス解析
4. 要約

本論文は第11回国際犯罪学会（1993）、および、日本犯罪社会学会第20回大会において報告したものに女性データを加え、さらに統計解析を追加して完成したものである。統計解析は、常磐大学の辰野文理専任講師、輿論科学協会の二宮悟郎氏の絶大なご援助を受けたことを記し、感謝の意とします。

序

日本では少年非行は戦後いつの時代でも大人社会の関心事であった。非行が増加しているときは、減少させるよう非行対策が求められたし、今の時代のように顕著な増加が見られないときは、青少年の心身が健全に成長するよう非行対策が求められる。英米では一つの非行対策を実施するに際しては、その合理性を担保する根拠として一つの非行理論が必要とされるが、日本では理論よりも経験的知恵が先行するという文化の違いがある。対策が（ほとんどは官庁が立案する）理論的基礎を持つことは理論的偏向として逆に嫌われる傾向がある。それゆえ、英米では理論は社会的ニーズのただなかにあると言える。戦後犯罪学の歴史のなかでいくつもの理論が現れたが（主として合衆国）、それらを統合して一つの新理論を目指す動きも、また見られる。これを統合理論の視点と称する。

これまで犯罪非行理論は欧米で作られ、わが国に輸入されるという経過をとってきた。個々の理論の追試的研究、事例解釈においての理論的妥当性の研究などはわが国でも行われている。しかし、統合モデルを包括的に試すような非行分析はまだ行われていない。本論は、高校生を対象とした非行調査の既存データを、再度、統計解析し、犯罪非行理論の統合モデルの有効性を検証する。

本論文は2部構成をとる。第1部で欧米（とは言っても合衆国が主である）犯罪学における統合理論の試みを紹介し、第2部で日本の高校生のデータを使って非行に対する説明力の強い理論を探索し、結果として英米で生まれた犯罪非行理論が日本の少年非行をどの程度よく説明するかを計量的に検証したい。英米の理論の「国越的（transnational）」検証である。

I 犯罪非行についての統合理論

1. はじめに

Hirschiの社会的コントロール理論以後、非行の原因を説明する新理論が

出ないままにそれまでの非行諸理論を統合する試みが起こった。どのような理論を統合して新しい理論構築とするかは研究者により異なる。統合の目的は、説明変数の種類を増やすことで非行に対する予測力を高めることにありとされる (Siegel, 1992: 242)。一つの理論では犯罪非行生起のある側面の原因論的説明を与えるが、他の側面はあえて捨象することになるからである。ただ、もしいくつかの理論の統合が、予測力の向上のみを目的として無原則に行われれば、それぞれの理論の主張はばかされて、一つの理論を深く追求すれば得られた一層の知識を失う羽目になるという批判を受けざるを得ない (Adler, Mueller and Laufer, 1995: 171)。しかしまた、統合を指向する過程で新しい知見が得られれば、無原則という批判は回避されるかもしれない。シーゲルは統合の試みを最近の重要な犯罪学的発展の一つと評価する (Siegel, 1992: 242)。また、ブラウンらは犯罪学理論の構築の新しいアプローチであると述べる (Brown, Esbensen and Weis, 1991: 467)。

2. 犯罪非行理論の統合の歴史

犯罪学の源流を求めてさかのぼればいくつかの源に行き着く。ベッカリア (1764)、ベンサム (1789) は犯罪の経済合理的選択論を唱え、モーズレー (1867)、ロンブローゾ (1876) は異常心理学的説明を試み、ゲーリー (1833)、ケトレー (1842) の地理学的説明、ついで、プリント (1851)、メイヒュー (1862) らは、犯罪社会学をスタートさせた。学説のスタート当初はさておき、やがてこれらの種々な見解を結びつけて考察しようという気運は出てきていたに違いないが、それは何時からか、学説史上でその証拠を見出すのは難しい。ショー、マッカーたちのシカゴ学派の非行研究のなかで早くも社会解体理論と学習理論の結合が見られるのである (Brown, Esbensen and Weis, 1991: 468)。それがはっきり理論家の学問上の議論として統合理論の提案の形をとって現れるのはたかだか30年前である。1960年にクロワードとオーリンが「非行と機会」という本を書いたが、これは比較的初期の統合の試みであった (Brown, Esbensen and Weis, 1991: 468)。彼らの差別的

機会理論は伝統的ストレイン（緊張またはストレスの意味）理論を社会的学習理論と合体させたものである。伝統的理論では、競争社会における成功と⁽¹⁾いう社会的目標が合法的に達成できる機会が身の回りにないとなると、それはその人にとって外部ストレスを形成するとされる。その時、人は非合法にでも達成できる機会を見出せば、非合法、つまり犯罪の道を行くことになる。しかし、合法を進むか、非合法へ走るかの機会によって非行が決まると考えるのでは不十分だとして、機会に対して学習要因を加えた。すなわち、青少年は同類仲間とのつき合いを通して非行的態度や正当化論理と共に非行の型を習得するとされた。ゆえに彼らの理論を非行の機会理論と呼ぶのは適当ではない。様々な機会がそれぞれ違った学習を生み、違った非行形態に結果するという機会－学習理論と正確には命名するべきであろう。

統合理論が登場する動機として、1. それまでにいくつかの犯罪理論が学界で認知されていること、2. いくつかの理論が出たあと、新しい理論が登場しない空白期があること、3. いくつかの理論を総合して説明する方がベターと思えるようなリサーチ結果が現れること、たとえば、フィラデルフィア、ロチェスター、デンヴァー、ピッツバーグ、ケンブリッジなどにおける長期追跡的研究の知見。4. 観念的統合はさておき、科学的実証的な統合を試みるとなると、理論的概念の変量化とコンピュータ計算の可能性が開けることという4点が指摘できる。ハーシーの社会的コントロール理論が出たのは1969年であったが、この犯罪理論の持つ強みの一つはボンドという理論上の概念を数量的変数に変換でき、したがって理論の妥当性を数量的に証明できることにあった。ハーシー以降、社会学的、心理学的領域では犯罪の新理論は停滞している状況にある。そのようにして、1978年に 그레이ザーが差異的予期理論という統合理論を発表したのである。以下年代順に主な統合理論を挙げると：

出版年	提唱者名	統合理論の名称, または書名
1978	グレイザー	差異的予期理論
1979	エリオット, ファインガ, アジェトン	エリオットの統合理論
1981	ワイズ, ホーキンス, セダストロム	社会的発達理論
1985	シュウェンジンガー & シュウェンジンガー	経済的獲得手段理論
1986	ウィルソン, ハーンスタイン	犯罪と人間性
1987	ソーンベリー	相互作用理論
1988	エリス	神経学的媒介による遺伝と環境の相互作用
1983	コルヴィン, ポーリー	統合的構造マルクス主義理論

3. 統合理論の概要

ここでシーゲルの犯罪学のなかから上記の各理論の簡単な紹介をすることにした。

①差異的予期理論

差異的接触理論の要素を古典学派犯罪学（合理的選択視点）やコントロール理論に結びつけた。人は犯罪の利得が損失より大きいと予期すれば、何時でも何処でも犯罪を決定する。しかし、その時の意思決定の方向は、利得と損失だけで決まるのではない。決定はそれまでの経験の蓄積のみならず、社会的ボンドの質にも左右される。このグレイザーの理論は統合理論の草分けである。

②エリオットの統合理論

ストレイン理論, 社会的学習理論, 社会的コントロール理論を一つのモデルに結合したもの。この理論によれば、通常の毎日の生活での失敗体験, 生長発達過程における不適切な社会化, 荒廃地域の居住は青少年と順法社会とのボンド（縛りの要素）を弱める。失敗体験の積み重ね, 弱い縛りは同類仲間とのボンドを強める。そのため、ますます順法社会から遠ざかる結果、非行に励むようになる。

3年間の1800人の面接調査。理論はおおかた支持されたが、違っ

たのは、順法社会の価値観を捨てなくても、非行仲間との強いバンドを発達させることができるのだという点。エリオットは、失敗体験者は非行仲間と結びつく以外、地域に彼らを受け入れる「健全な」サークルがないと解釈する。また、年少期に薬物や非行を試しにやった子供はその後、非行グループに深入りすることになる。この理論は次のワイスの理論とあまり変わらない。

③社会的発達理論

社会的コントロール理論を社会構造理論と合わせたもの。このモデルでは、社会構造変数として性、人種、経済的地位を先ず設定する。低所得で、荒廃状況にあるコミュニティでは、家庭はストレス下にあり、教育施設は不十分であり、物は不足であり、順法精神は薄い。家庭や学校を含む社会統制の諸機関は機能不全で、未成年を犯罪グループの魔手から守れない。学校や家庭にいても楽しくも面白くない未成年は、街頭で同類の少年との交遊を求め、好都合や見返りを約束してくれる非行に走ることになる。

④経済的獲得手段理論

マルクス主義理論の基本的考え方に伝統的な犯罪学理論の考えを統合した。すなわち階級闘争と非行副次文化理論を結合した。この理論によれば、犯罪性は市場の需給関係、社会秩序関係、青少年の現代的ライフスタイルの産物であるとする。

警察の犯罪統計では下層の青少年の犯罪率が高いのに、自己報告式調査の結果では階層差が出ないのはなぜかを問う。社会階層の代わりに、目立つ服装、髪型、言葉を持つ青少年の社会的ネットワークの存在に注目し、両シュウェンジンガーは勢力層（stradom）形成という概念を新造する。彼らは非行率の高い3つの勢力層グループを指摘する。①は「名士」などと呼ばれ、中の下層出身の子弟であり、金持ち階級のスタイルをまねる。②は中間グループで、「波乗り」、「暴走」などの名前を持ち、中間ゆえに特徴はあいまい。③

は①と対照的であり、街頭にたむろするグループで、「油差し」、「頭巾」などの名前で呼ばれる。各勢力層は特定の社会階級に集中して存在する。一匹狼の下層出身非行者もいるが、彼らの非行率は低い。

青少年は勢力層に属しながら、年少期、中学期、青少年後期と生長する。年少期は非行的態度を強め始め、小非行をする。中学期はグループ間の抗争、公衆への示威行動をする。後期は窃盗、強盗、薬物の売買、暴力犯を実行するが、金銭を得る手段としてとされる。金銭指向は③のグループでとくに顕著である。つまり、従来の「社会階層」とは別に、青少年文化のなかに育つ「勢力層」の一つに属して非行に励むという図式が成り立つ。

⑤犯罪と人間性

生物社会的、合理的選択、社会的理論を統合する試みである。かりに犯罪をする場合の物質的、精神的損得の期待値と、犯罪をしない場合の損得を比較計量して、人は犯罪をするかしないかの結論を出す。順法方向に社会化されている人でも、その場において犯罪の道は利得が大と計量されれば、犯罪を実行する。ここまでは合理的選択理論と同じ。

ところで、犯罪の方向へ天秤が傾く要因として遺伝的資質、知能、体型などの生物社会的要因を重視する。さらに感情混乱の家庭、学業の失敗、逸脱副次文化への参加も犯罪へ導くのに重要であるとする。とくに犯罪と低知能との関係の強調は改めて論議をよんだ。

予想に反し、ウイルソンとハーンスタインは犯罪対策として「自由意思→責任→厳罰」方式をとらず、子供を順法へ導くための家庭の再生、責任感覚を教える学校教育を提唱した。

⑥相互作用理論

社会解体、社会的コントロール、学習、認知理論を統合し、犯罪非行生活の発達の生育史をモデル化した。

非行生活史の始まりでは社会階層、解体地域の居住、人種、性別などの構造的要因を指摘し、これらは、不良とのつき合いを助長し、犯罪を容認する態度を学習させ、また、家庭や学校が育てるはずの社会的ボンド（順法への拘束）を弱める結果をもたらす。一旦非行化すると、非行仲間に深入りし、ボンドはますます弱まるという悪循環の相互作用に陥る。

青少年の生活史を長期に分析すると、彼らのものの見方に3段階の発展ありと言う。年少期は、順法に至るかどうかが、非行を防げるかどうかはまったく家族次第である。中期は、家族の影響は弱まり、友達、学校、青少年文化の世界が広がる。成人期は、行動選択は世間における自分の立場、自分の核家族に依拠して行われるだろう。

ソーンペリーらのチームの研究はロチェスター青少年発達研究と呼ばれ、発達犯罪学の一派をなす。

⑦神経学的媒介による遺伝と環境の相互作用

生物学的、心理学的、社会学的要因を統合したもの。エリスに関し3つの命題をもって紹介する。(1)すべての人間行動の基盤には脳の物理-化学的機能がある。(2)脳の機能は遺伝的、社会的条件によりコントロールされる。(3)脳に対する環境的影響は物質的(薬物、化学物質、損傷など)と、経験的(学習効果など)要因から来る。以上の生物-社会的統合理論が犯罪を説明し、犯罪行動をコントロールすることができるとする。

⑧統合的構造マルクス主義理論

犯罪は家族における子供に対する不適切な社会化の結果であるが、その家族関係は市場関係に左右されている。というのは、親は賃金労働者として外の職場で働くときに、上司や雇用主からの威圧的影響力を体験する。このようにして労働の場におけるストレスや疎外感を家庭に持ち込み、子供に対し気まぐれなしつけや懲罰主義をもって接することになる。子供は親と精神的に離れ、学校とも摩擦を

感じるようになる。底辺の労働者の子弟は貧弱な学校へ行き、標準テストにしくじり、劣等生クラスに入れられるが、これらは非行の玄関口である。同類仲間とのつき合いで一般社会からの疎外感はさらに加速される。同類仲間は盗み連中あり、暴力連中ありといった具合である。根源的原因に触れずに非行対策ができると考えるのはあまりに素朴すぎる考え方である。

以上のように犯罪非行の一層十分な説明のため種々な統合理論が提案されてきている。統計学的にいくつかの変数群で説明できるということは、いくつかの変数が非行の形成に参加していると解釈してよいのである。つまり説明とは原因解明である。この方向は現在の犯罪学の重要な発展を示すものと考えられる。しかし統合理論は精細度が粗くなることは否めない。一つの視点を徹底追及する単一理論を中心にすえながら、折々に統合の試みがなされていくことが望まれよう。

II 統合モデルによる非行の説明：日本のデータによる検証

1. 目的

男女高校生を対象にして非行を計量的に説明するのに有効な理論的変数を見出し、それら変数による非行原因の統合理論の可能性を探求することを目的とする。この統計的解析を行うことにより欧米産の犯罪非行理論がわが国の高校生非行に対してどの程度適用しうるかを検証することになる。

2. 方法

a. オリジナルな調査の企画、調査票

高校生の非行問題に直面して、非行化の程度と非行に関連する諸要因（家庭生活的、学校生活的、人格的、認知的などの要因を含む）を明らかにする調査が1981年に科学警察研究所防犯少年部において構想された。調査は質問紙を用いて行うこととし、最終的にA 4判 8頁の調査票が作られた。要因を

どのように具体的な質問の形にするかについて研究メンバーで討議が重ねられたが、討議では、それまでの非行理論の動向、とくに社会的コントロール理論の検証への関心、日本の学生に対する適用の可能性も論じられた。ただ、質問化にあっては社会的コントロール理論の範囲にとどまらず、他の理論も多面的に参照されたので、完成した調査票には広範囲な質問項目が収録されることになった。一方、非行化の程度は、自己報告形式の回答を集計した非行尺度をもって測定する。尺度の詳細は後述する。

b. 今回の再分析の企画

今回の分析は上記のオリジナルな調査データを使い、当初のデータの2次元分析の性格を持つ。分析の枠組みとして従属変数は自己報告によって測定された非行尺度であり、説明変数は非行の諸理論を計量化して統計解析に乘せられるようにした変量（以下、理論変数と呼ぶ）である。非行の諸理論を数量変数になおして、回帰分析を試み、非行に対する各理論の説明力の強さを比較考量するのが再分析の企画である。説明力の強い変数は有力な原因とみなされる論法である。

そもそも理論の有効性を証明するためには、1. 他の既存の理論との論理的一致、不一致を観念的に考察する、2. 個別犯罪の科学的事例研究をする、3. 理論を計量化（数値化）変数になおして統計解析をする方法がある。ここでは第3の方法を試みるしだいである。

c. 第1次解析のための理論的変数の作成、理論の計量化

社会的コントロール理論（またはボンド理論）では、愛着、人生関与、健全な忙殺、所信というボンドの4要素が犯罪動機を抑え、人をして順法の道を歩ませると主張する。今回の質問紙では愛着をさらに父、母、学校という3つの側面の愛着に分けたので、合計6つのボンド要素にわたり質問を作成した。社会的コントロール理論はおよそ犯罪への動機は人々の内面にあらかじめ存在しており、改めて犯罪動機の形成を検証する必要はないと前提するが（いわゆる性悪説）、動機が犯罪・非行行動に具現しないよう抑えられているのが人の常態であり（抑えているのか抑えられているのか、実際には両

面であろう), そのためには上記のボンドの諸要素⁽²⁾が働いているとする。非行に出るのはこの4要素の働きが弱くなっていると考ええる。質問に組むときは、ボンドが弱いかどうかを測定できる回答をしてもらえばよい訳である。その際、一つの要素を一つの質問で測定するのではなく、いくつかの質問で聞き、合わせて一つの尺度とした。そのため、先ず、各回答を合算して粗点に変え、次にそれをそのまま、あるいはいくつかの粗点を統合して段階の点数に変えて、きれいな頻数分布になるようにし、個人の尺度値とした。

その個人の、その尺度値が高いことはその人がそれだけコントロールを受けていると判定される。このようにしてコントロールされていればいるほど非行の程度が顕著に低いとなれば、ボンドの非行抑制力を証明したことになる。逆に尺度値が低い者ほど非行を生じさせるはずである。調査票では6つのコントロール要素を質問化した。どのような質問で聞いているかは表1に示される。

いくつかの意味でこの理論と対照的な理論として、構造化理論、ストレイン理論、レイベリング理論、中和の理論、社会的学習理論などが注目されるところであり、それらも理論変数として質問紙に組み込まれた。どのような質問になっているかはやはり表1に示す通りである。

また、構造的な変数として保護者の出身階層、生徒の所属する高校の偏差値ランキングがとられている。社会学的調査では被調査者の社会経済的階層の測定は欠かせないが、学校生徒向けの調査では現今はとくに実施が困難であり、割愛した。今回は保護者の職業を質問したが、それも精細な分類は許可されなかったので、あまり成功したとはいえない。性別についてはとられているが、分析の際、男女をコントロールして分析するのに利用する。偏差値ランキングを構造化の変数の一つと考えたのは、偏差値ランキングが知能水準という心理生物学的性質を表すのではなく、序列による学校教育界の構造化の一指標と見なすからである(表1)。

以下、表1を参照しながら、各非行理論の変数化について解説する。スト⁽³⁾レイン変数は非行動機が形成される素地であるところの階層起因の(個人の

表1 第1次解析の理論変数を構成する若干の質問内容

第1次解析の 18理論変数	理論上の 分類	質問 項目数	内容説明（字句は質問紙の正確な表現ではない）
X ₁ 保護者の出身階層	構造	1	父または母の職業について聞き、ホワイト層と非ホワイト層に分ける
X ₂ 学校のランク	構造	1	高校受験ガイドの合格偏差値を参照し上位、下位の2分類とする
X ₃ 学習ストレス	スト	9	中学時と高校時との成績の落差の本人認知、授業が分からない、出来なくて皆の前で恥をかかされる、勉強、勉強ということに反発などから合成して点数尺度化
X ₄ 逸脱ストレス	スト	7	大人が言うきまりやしきたりは窮屈だ、何となくすかつた気分になりたい、ちょっとしたことでも頭に来る、羽目を外しても好きなことをしたいなどを加算
X ₅ 自閉無力ストレス	スト	8	学校の成績をあきらめている、家で一人で過ごす、友達はいない、熱中できるものがない、人よりダメと思いがち、努力しても無駄などから合成
X ₆ 心身ストレス	スト	4	トイレの時間が決まらない、くたびれる、だるい、おなかをこわすなどを加算
X ₇ 不良との接触模倣	学習	12	悪い友達がよくてくる、友達と街で遊び、アルバイトをする、学校でよく注意される友達あり、タバコをすっている友達あり、喧嘩の好きな友達ありなどを加算
X ₈ 逸脱型の選択学習	学習	7	かりに気分転換をしたいと思ったとき、したいと思う行動の選択。車をとばす、物をこわす、酒やタバコをのむ、家出する、空想する、万引きをするなどの選択を加算して点数尺度化
X ₉ 小学校時の非行歴	学習	1	小学校時の非行、問題行為の自由記入を求め、加算して点数化
X ₁₀ 父への愛着	コン	6	父は温かい、分かってくれている、性格面で父のようにになりたいなどを加算
X ₁₁ 母への愛着	コン	6	母は温かい、分かってくれている、性格面で母のようにになりたいなどを加算
X ₁₂ 学校への愛着（アタッチメント）	コン	14	加算得点項目（授業、クラブ活動、先生との交わりは楽しい、気にかけてくれる先生あり、行きたいと思っていた学校など）と、減点項目（私たちを避けている先生あり、学校なんて自分には関係ない、転学退学を考えたなど）との合計点を出す
X ₁₃ 人生関与（コミットメント）	コン	6	学校のよい成績をとりたい、上の学校へ行きたい、日々予定をたてて過ごす、自分の力を伸ばしていける、将来を深く考えたことがないことはないなどから合成
X ₁₄ 健全な忙殺（インボルブメント）	コン	9	勉強時間を長くとり、趣味のことをする、家の手伝いをする、スポーツ・サイクリングをする、コンサートに行く、塾で勉強する、クラブサークル活動などから合成
X ₁₅ 所信（ビリーフ）	コン	9	学校の規則は秩序を保つため、校風や伝統の良さを保つため、人間として守らねばならぬことあり、新聞な警察が大騒ぎしているとは思えないなどから合成
X ₁₆ 中和の観念	中和	6	犯罪的、不良行為の仮想場面を示し、行為の正当化理由を示して行為の容認か不賛成かの態度を聞く
X ₁₇ 逸脱的自己概念	レイ	8	自分は非行または不良少年だと思う、親、教師からふまじめな生徒と思われている、生徒、子供、社会の一員としてよくやっていない、友達から悪（わる）扱いされるなどから合成
X ₁₈ 社会対応	レイ	5	犯罪、不良行為を行ったとき、実際に受けた対応、すなわち、発覚せず、親の叱責、先生の注意、警察補導、家裁呼び出し別に分けて聞き、段階別に重みづけて点数化する

注. 1. 理論上の分類における略号の説明：構造は社会構造、ストはストレスまたはアノミー理論、学習は社会的学習理論、コンは社会的コントロール理論、中和は中和の理論、レイはレイベリング理論を意味する。

せいではない) 不適応, ストレス状態を変量としたものであり, 今回の質問紙では, 学習面, 逸脱へ向かう傾向, 自閉性無力感を暗示する兆候, 心身の不適応状態という4側面に分けて数量変数化された。自閉性無力感はいずれ自体エネルギーの欠けた状態とすれば行動の原動力とはなり得ないであろう。しかし自閉, 無力から脱出しようとして, ある種の行動にでることは予想され, その意味では自閉無力を全くエネルギーの欠けた状態とはいえない。

社会的学習理論は, 現在の不良の付き合い関係の濃さ(不良接触模倣と名づける変数), 問題に対処するに際し逸脱的対処法の選好度(逸脱型の選択学習), 小学校時の非行, 問題行動の有無の3変数を用意した。不良接触模倣は友達付き合いのなかで非行的態度, 非行の手口, 手段を学習することを意味するので学習理論の一変数と考えられている。しかし, 付き合いの産物は上記学習だけではない。仲間からの精神的支え, 悪事の教唆, 競争心理による非行のエスカレート, 過度の非行の抑制など交遊の集団効果は複雑である。それを社会的学習理論の一変数からだけ見るのは単純すぎるかもしれない。現にファーリントン, ハーシーたちは非行行動と不良との交遊は同じことと解し, 物事の裏と表だとみなす。逸脱型の選択は, 仮想場面の行動の選好を経験学習の結果とみなし学習の一変数とした。小学校時の非行歴は後年の非行選択に対し学習効果をおよぼすと見て学習の変数に加えた。

中和の理論を変数化するに際しては, ルール侵犯の仮想事態を示してルール違反を容認する態度をとるか, 違反を否定する態度に出るかについて聞く質問を作成した。違反容認の回答選択肢には正当化の論理をつけ, 否定にはそれだけの理由をつけた。このように質問構成をしたため回答者が違反容認の選択をした場合, 容認に賛成したのか, 正当化(中和)の論理に賛成したのかについてあいまいさが残る。社会対応の変数は, レイベリング理論の一部をなすものであるが, その実際経験を回答者に報告してもらった方法を採用した。以上, これらの理論も質問紙のなかでいくつかの質問として分散配置され, コントロール理論の場合と同じように, 点数尺度化され, 数量変数とされた。始め, 理論の変数化に際し, 24個の変数が作られたが, 検討後, 第1

表2 第2次解析のための理論変数の作成：
第1次と第2次との変数の対応表

第1次解析の理論変数	第2次解析の理論変数	第1次解析の理論変数	第2次解析の理論変数
X ₁ 保護者の出身階層	×	X ₁₀ 父への愛着	nX ₅ コントロール理論Ⅱ
X ₂ 学校のランク	×	X ₁₁ 母への愛着	nX ₅ コントロール理論Ⅱ
X ₃ 学習スタイル(圧迫感)		X ₁₂ 学校への愛着	nX ₄ コントロール理論Ⅰ
X ₄ 逸脱ストレン	nX ₂ ストレン理論	X ₁₃ 人生関与(コミット)	nX ₄ コントロール理論Ⅰ
X ₅ 自閉無力ストレン	×	X ₁₄ 健全な忙殺	nX ₄ コントロール理論Ⅰ
X ₆ 心身ストレン		X ₁₅ 所信(ビリーフ)	nX ₄ コントロール理論Ⅰ
X ₇ 不良接触模倣	nX ₆ 社会的学習理論Ⅱ	X ₁₆ 中和の観念	nX ₃ 中和理論
X ₈ 逸脱型の選択学習		X ₁₇ 逸脱的自己概念	nX ₇ レイテツング理論
X ₉ 小学時非行歴	nX ₁ 社会的学習理論Ⅰ	X ₁₈ 社会対応	nX ₇ レイテツング理論

注， 1．第2次理論変数の欄のnXは第2次の新変数をあらわす。×は第2次解析の段階では使わないことを意味する。

次の解析では6理論を示す18個の変数が設定され（表1），次節で述べられる第2次解析では7個の変数に圧縮された（表2）。

およぶ。

d. 第2次解析のための理論変数の作成，理論変数の圧縮

上記18個の変数を見ると，一つの理論がいくつかの変数に分かれているものもある。原則として一理論を一変数とするため18個の変数をさらにまとめることにした。ただ，社会的学習理論と社会的コントロール理論については，1変数にするのは粗すぎると判断し，2変数構成とした。統計解析は，先ず18変数を用いて分析を行った。これを第1次の解析とする。18変数を7個に集約して第2次の理論変数と称し，この変数を用いて第2次の解析を行った。18変数をベースにして7個の新たな変数を作成した仕組みを表2に示す。

e. 従属変数の作成，非行の計測

従属変数である非行に関して，1．全非行，2．法違反非行，3．不良的非行，4．レッテル化非行という4種類を用いた。質問紙の23項目の非行がいくつかのサブグループに細分類できるかどうかを知るため回答を林の数量化理論Ⅲ類により分析した。その結果，23項目を法違反タイプと不良的タイプと名づけ，2分類とするのが適当という結論を得た。法違反タイプの非行

は12項目、不良的非行は11項目からなる（次頁参照）。

それら非行について点数尺度に変換して非行の強度を表すことにする。調査票では非行的行為のそれぞれに対して最近1年間にしたことがあるかどうかを尋ね、「時々あった」「1・2回あった」「なかった」という3件法で答えを求めている。集計では「時々あった」と「1・2回あった」をいずれも1点、「なかった」を0点として単純に加算して粗点とし、それを非行度とした。すなわち、法違反非行の粗点は0点から12点の間に分布するが、1から7点の点数尺度にまとめた。不良的非行は0点から11点の間に分布するが、1～12点の尺度とした。この方法で測定される非行度は非行の種類が多さの程度である。理論的にいえば、たとえ、非行が1種類でもそれを多数回していれば非行度が高くてよいはずであろう。未成年では実際にはそういう例はまれであり、非行度が進むというのは多種類に広がるといってもよいのである。

なお、全非行尺度は23項目全部の集計であり、粗点は0から23点の分布につき、それを統合して1～10点の尺度とした。また、「レッテル化非行」は全非行の粗点と、上記非行をしたと答えた場合に実際に受けた社会対応の形態とを組み合わせることにより作成された。各項目について、「あった」と答えた場合の対応をその都度聞いていないので、こうせざるを得なかった。概して低非行では無対応が多かった。1点から3点の尺度である。すなわち、

- 1点・・・全非行の粗点が0から7点までで、同時に、何ら対応を受けなかった場合。低非行・無対応型の非行
- 2点・・・同じく粗点が4から11点までで、同時に、対応の形態において人に見つかった、あるいは親に叱られたと答えた場合。中非行・非公的対応型の非行
- 3点・・・同じく粗点が8点から23点までで、同時に、対応の形態において学校の先生の注意、指導、あるいは、警察や補導センターの補導、あるいは家庭裁判所の呼び出しがあったと答えた場合。高非行・公的対応型の非行

以下に、2つの分類に該当する非行項目を示す。質問紙の言い回しそのままではなく、簡略化して示すことにしたい。

法違反非行の12項目

1. 万引き
2. 金品を脅して取りあげ
3. 放置自転車の無断乗り
4. シンナー，トルエン乱用
5. なぐって傷を負わす
6. 盗品を買ったり，もらったりする
7. 学校で生徒の金品をとる
8. 駐車の家，バイク，自転車の部品をとる
9. 学校の物をわざと壊す
10. 友達と生徒をいじめる
11. 親をひどく怒らせる
12. よその家から金品をとる

不良的非行の11項目

1. 余分のつり銭をだまって受けとる
2. タバコをすう
3. 親にかくれて酒を飲む
4. 成人映画を見る
5. 自販機からポルノ雑誌を買う
6. 親に無断で外泊
7. 禁止の服装，髪型で登校する
8. パチンコをする
9. バイク，自動車の無免許運転
10. 学校の授業をさぼる
11. 親の金を持ち出す

f. 対象サンプル

調査への協力を懇請する依頼の手紙が都内の高校へ層別無作為に発送された。男性については19の私立、都立校から応諾の返信があり、最終サンプル数は1041人となる。女性については21の私立、都立校から応じる旨の返事があり、最終サンプル数は1031人となる。彼らは年齢が17～18歳で、高校2年生の3学期、3年生の1学期に在籍する。父親がいないと答えたのは、男性が36、女性が35、母親がいないと答えたのは、男性が10、女性が14である。

g. 実施法、実施時期

質問紙を学校へ一括発送し、無記名式、その学校の教師によって学級で集団実施された。調査は、私立校が1981年（昭和56年）の1月から3月までの間、都立校が同年5月から6月にかけて実施された。

h. 統計分析の方法

第1次解析では18個の第1次理論変数による非行の重回帰分析を行い、第2次解析では7個の第2次理論変数による重回帰分析、パス解析を行うことにする。重回帰分析を行うにあたり、第1次の18個の変数相互、および第2次の7個の変数相互の相関を調べたところ、著しく高い相関を示した変数ペアは見あたらなかったので、全部の変数を分析に用いることにした。分析作業の過程で、各変数の頻数分布と平均値、変数の尺度化、非行と説明変数間の、説明変数相互の間の相関係数の算出なども行われたが、紙数の関係で記載を省略する。

3. 結果と考察

A. 4タイプの非行間の相関

非行を4タイプに分けて重回帰分析などを一々行うことにしたが、実際には非行タイプ間の関連はかなり高いことがわかった（表3、4）。しかし、なかでは法違反と不良的非行は相関が男女ともやや低いと認められるが、それでも0.5以上の値を示すから、このことは、両タイプの非行は判然と分か

表 3 非行尺度間の相関：男生徒サンプル

	Y 1	Y 2	Y 3	Y 3
Y 1 全非行	1.000	.8477	.9409	.7424
Y 2 法違反非行	.8477	1.000	.6440	.6895
Y 3 不良的非行	.9409	.6440	1.000	.6725
Y 4 レッテル化非行	.7424	.6895	.6725	1.000

表 4 非行尺度間の相関：女生徒サンプル

	Y 1	Y 2	Y 3	Y 3
Y 1 全非行	1.000	.6785	.9597	.6590
Y 2 法違反非行	.6785	1.000	.5484	.7111
Y 3 不良的非行	.9597	.5484	1.000	.6566
Y 4 レッテル化非行	.6590	.7111	.6566	1.000

れているというより、同一人に混在して行われていることを示す。

男女をくらべれば、概して女性は男性より若干相関値が低くでる傾向がある。それでも0.5以上の値である。

B. 第2次解析の理論変数間の相関

回帰分析にはいる前に、上記の手続きで計量化した犯罪理論の関連度を相関係数により見ておくことにする。

回帰分析の際、相関があまり強いと説明変数として強い者同士を同時に組みこむのは計算上適当ではないことになる。また、あまりに低いのは計量化が適切に行われたのかどうか疑問がでるであろう。なぜなら、かりに2つの理論が非行の説明に有効とするならば、非行という変数を媒介にして2つの理論は相関を示してよいはずだからである。表5と6では第2次解析の7個の理論変数の相関マトリックスを示す。表5の男性サンプルを見ると、1%水準ですべての相関が有意である、つまり相関がゼロではないといってよい。ただし、.7とか.8とかの高い相関を示すペアは認められない。相関の大きさは程々である。2つのコントロール理論の変数、nX4とnX5はすべての他の理論とマイナスの関連を持つ。元々コントロール理論の趣旨は、変数の尺度値が高くなれば（つまりコントロールが高まれば）非行は抑制されるの

表 5 第 2 次理論変数間の相関：男生徒サンプル

	nX ₁	nX ₂	nX ₃	nX ₄	nX ₅	nX ₆	nX ₇
nX ₁ (社会的学習 I)	1.00	.170	.201	-.079	-.068	.200	.216
nX ₂ (ストレイン)		1.00	.309	-.272	-.178	.339	.360
nX ₃ (中和理論)			1.00	-.273	-.136	.369	.269
nX ₄ (コントロール I)				1.00	.296	-.394	-.323
nX ₅ (コントロール II)					1.00	-.183	-.176
nX ₆ (社会的学習 II)						1.00	.464
nX ₇ (レイベリング)							1.00

注, 1. 相関ガゼロでないことの検定は 1 % 以下ですべて有意である。

2. 相関値の最大は 0.46 である。

表 6 第 2 次理論変数間の相関：女生徒サンプル

	nX ₁	nX ₂	nX ₃	nX ₄	nX ₅	nX ₆	nX ₇
nX ₁ (社会的学習 I)	1.00	.128	.121	-.095	-.096	.233	.154
nX ₂ (ストレイン)		1.00	.341	-.288	-.200	.395	.357
nX ₃ (中和理論)			1.00	-.292	-.137	.372	.230
nX ₄ (コントロール I)				1.00	.272	-.371	-.281
nX ₅ (コントロール II)					1.00	-.185	-.183
nX ₆ (社会的学習 II)						1.00	.387
nX ₇ (レイベリング)							1.00

注, 1. 相関ガゼロでないことの検定は 1 % 以下ですべて有意である。

2. 相関値の最大は 0.39 である。

に対し, 他の理論は, 理論変数の尺度値が高まれば, 非行が多発するように定式化されているからである。

概して相関は高くない。マトリックスで相関値の出方について男女間で比較をすると, 大きな違いが認められなかった。男女間で非行理論の構築法を変える必要はないことを暗示する。この見解は次節以降の重回帰分析のところではっきりするであろう。

C. 18 個の変数による第 1 次の重回帰分析

① 重回帰分析の方法

説明に有効な変数を抽出する仕方として, いくつかの重回帰分析の方法が開発されている。いずれの方法で重回帰分析を行うかについて, 変数増加法, 変数減少法, ステップワイズ法, 総当たり法などが試みられたが, 結局, 方

法論的優劣もさりながら利用プログラムの好都合もあって変数減少法が採用された。この方法で男性と女性、上位校生と下位校生のサンプル別に重回帰分析を実施した。

変数減少法は、はじめに説明変数全部で分析を行い、次に、あらかじめ決められたところのF値が5%なり1%以上の、もっとも寄与率の小さい変数（すなわち、あっても無くても予測・説明の精度にあまり関係ない変数）1個を見つけてそれをとり除いて重回帰を行い、以下、順次1個ずつ除いて重回帰を行う手続きを反復する。このようにして、説明上きわめて重要な変数だけが残し、これ以上減らせない変数のセットに達したときは、すべての変数が、ある有意水準で説明に有効な変数となっているはずである。それを見て、いくつの変数で、対象をどの程度よく説明しているか、いずれの変数が説明力においてとくに高いか低いかを判定する。もちろん、はじめ全部の変数で重回帰を行ったとき、F値が非常に低く、有意水準に達しなければ、その分析計画は無意味ということになろう。今回の分析では変数減少のための有意水準はすべて5%に設定した。

②結果の全体的所見

偏回帰係数がすべてゼロ、つまり説明変数のいずれもが重回帰分析に有効でないと結論できるかどうかはF検定で判断する。すべての試行においてF値は0.01%の水準にあるから、少なくとも1個以上の理論的変数を用いて重回帰方程式を作り、非行を有効に説明できると総論される。説明の精度は決定係数で計られるが、その値は30から50%であるから、人間の社会行動の説明としては決して低い値ではない（表7）。

男女の全サンプルを対象としたY1から4までの重相関係数の値に注目し、一方、18個の変数のなかでYに対する単相関のもっとも高いX7（単相関の表は記載省略）に注目しながら、各非行タイプ別に比較する。

表 7 第 1 次

試行 → 性別 → 全・校群別 → 従属変数	男性				女性				
	全サンプル				全サンプル				
	Y 1 全	Y 2 法違反	Y 3 不良的	Y 4 レッテル化	Y 1 全	Y 2 法違反	Y 3 不良的	Y 4 レッテル化	Y 2 法違反
	説明変数								
X ₁ 保護者の出身階層		.048 (.159)			-.050 (-.164)				.111 (.342)
X ₂ 学校のランク				-.067 (-.081)		-.106 (-.175)	-.050 (-.235)		×
X ₃ 学習ストレイン			.080 (.093)		.055 (.035)		.083 (.077)		×
X ₄ 逸脱ストレイン	.082 (.109)	.076 (.074)	.073 (.130)		.097 (0.91)		.061 (.084)		.125 (.111)
X ₅ 自閉無力ストレイン									
X ₆ 心身ストレイン				.062 (.044)		.059 (.054)			
X ₇ 不良との接触模倣	.384 (.309)	.337 (.196)	.382 (.413)	.400 (.095)	.370 (.248)	.349 (.120)	.371 (.360)	.562 (.107)	.279 (.155)
X ₈ 逸脱型の選択学習	.064 (.165)	.061 (.112)	.051 (.177)	.064 (.045)	.062 (.125)		.099 (.102)	0.60 (.174)	0.80 (.144)
X ₉ 小学校時の非行歴	0.51 (.077)	.068 (.075)		.077 (.035)	.095 (.190)	.061 (.063)	.088 (.256)	.086 (.044)	.087 (.085)
X ₁₀ 父への愛着									
X ₁₁ 母への愛着	.060 (.084)	.050 (.051)							
X ₁₂ 学校への愛着 (アタッチメント)	-.083 (-.074)	-.088 (-.056)	-.066 (-.078)						
X ₁₃ 人生関与 (コミットメント)					.057 (.069)		.077 (.136)		
X ₁₄ 健全な忙殺 (インボルブメント)					-.099 (-.122)		-.093 (-.154)	-.066 (-.016)	
X ₁₅ 所信(ビリーフ)	-.092 (-.112)		-.105 (-.172)	-.084 (-.027)	-.082 (-.071)	-.071 (-.032)	-.078 (-.097)		
X ₁₆ 中和の観念	.093 (.139)	.099 (.107)	.077 (.153)	.079 (.033)	.119 (.140)		.147 (.250)		.100 (.099)
X ₁₇ 逸脱的自己概念	.055 (.086)			.095 (.042)	.101 (.121)	.068 (.042)	.117 (.204)	.102 (.029)	
X ₁₈ 社会対応	.201 (.746)	.224 (.601)	.175 (.873)	×	.107 (.527)	.152 (.388)	.078 (.557)	×	.209 (.623)
重相関係数 R	.709	.625	.672	.581	.700	.570	.699	.620	.593
調整決定係数 Adj. R ²	.503	.391	.452	.338	.491	.325	.488	.384	.351
F 値	106.3	75.4	108.3	51.2	83.9	63.1	83.0	101.7	37.6
p>F	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001

注, 1. 説明変数に与えられた数値のうち, 上段は標準偏回帰係数, () は偏回帰係数である。

3. 空欄は, 5%の有意水準に達しなかったので最終の有効変数セットから削除されたことを

重回帰分析の結果の要約

男性		女性			男性			女性			有意な変数の個数の計	
上位校生		上位校生			下位校生			下位校生				
Y 3 不良的	Y 4 レッテル化	Y 2 法違反	Y 3 不良的	Y 4 レッテル化	Y 2 法違反	Y 3 不良的	Y 4 レッテル化	Y 2 法違反	Y 3 不良的	Y 4 レッテル化	男	女
× × .141 (.253) .374 (.419) .098 (.356) - .114 (-.188) .238 (.142)	× × .431 (.087) .106 (.064) .134 (.047) × ×	× × 0.84 (.022) .408 (.119) .100 (.084) - .083 (-.044) - .085 (-.137) .083 (.040)	× × .167 (.282)	× × .543 (.093) .147 (.060) - .099 (-.023) .116 (.027) × ×	× × .080 (.055) .369 (.224) .065 (.077) .072 (.075) - .114 (-.076) .155 (.129) .288 (.580)	× × .163 (.728)	-.094 (-.129) .113 (.088) .400 (.105) .116 (.062) - .130 (-.214) - .097 (-.035) .106 (.049) .111 (.056) × ×	× × .329 (.124) .126 (.145) .112 (.075) .083 (.058) .222 (.577)	× × .107 (.110) .091 (.128) .341 (.321) .166 (.207) - .095 (-.174) - .105 (-.135) .180 (.301) .109 (.193) .091 (.591)	× × .105 (.035)	3	1
											3	4
											5	3
											—	—
											2	1
											10	10
											7	4
											6	8
											—	1
											4	—
											5	—
											—	4
											—	5
											6	4
											8	6
4	10											
7	5											
.67	.528	.522	.678	.581	.643	.667	.613	.583	.706	.645		
.448	.279	.273	.460	.338	.413	.445	.376	.340	.499	.416		
78.0	50.5	40.3	75.6	46.0	58.1	66.1	36.0	53.1	51.3	102.1		
.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001		

2. ×は、重回帰分析のときそもそも説明変数に組み込まれなかったことを意味する。
意味する。

性別	男 性				女 性			
非行タイプ	Y 1	Y 2	Y 3	Y 4	Y 1	Y 2	Y 3	Y 4
18の重相関係数	.709	.625	.672	.581	.700	.570	.699	.620
X ₇ との単相関	.627	.546	.599	.540	.615	.509	.615	.605

X₇変数単独の相関にくらべ、複数个の変数による重相関の方が結果がよくなることがわかる。変数の個数が増えれば、重回帰分析の性質からして自然に相関値は高くなる。ここでは相関値に対する変数の増減の効果をそのつど検定しているから、この値の増加は有意である。説明の精度の向上に関して変数を複数个にした価値はあるというものである。

③説明に有意な変数の抽出

表7で偏回帰係数が記載されている変数は5%水準で説明に有効なものである。種々な試行のなかで変数の個数は変化するが、少ないのは2～3個、多いもので10～12個を数える。個数が多いほど決定係数が飛躍的に大きくなるとは言えない。18個の変数のなかでとくに大きな標準偏回帰係数を示すものは、また、いろいろな試行の場合、いつも重要なものとして登場する傾向がある。それらはX₇、X₉、X₁₆、X₁₇、X₁₈である。理論名でいえば社会的学習、中和理論、レイベリング理論である。なかでもX₇、不良との接触模倣は群を抜いて注目される。逆に、自閉無力、心身、父への愛着は非行決定因子としては弱い。ゆえに極く一般化して言えば、高校生非行は不良との接触模倣を土台とする社会的学習により半ば作られる。ただここでX₇変数が表す友人を不良と称するのは大人の規範世界から見て仮にそうなのであって、彼ら同士ではそう思っているかどうか。彼等の主観では良い友達と思っていっこうかまわない。因みに調査票では不良友だちの語は使っていない。

④試行別の検討：性別、非行タイプ別、学校群別検討

男性と女性群とで重回帰分析の結果の違いがあるか、どうか。もし違いがあるならば、男女の間で非行の原因論を分けて考える必要があることを暗示するものである。両性とも、いずれの非行タイプに対してもX₇が飛び抜け

て説明力が大きいのであるから、不良との交遊こそが男女とも非行形成に決定的に重要である。⁽⁴⁾ 標準偏回帰係数の値から見て、 X_7 は女性のY 4タイプの非行の形成において他の説明変数以上に一層大きな役割を果たすようである。偏回帰係数を見たとき（表7の括弧表示の数値）は事情が異なり、男女共通に、他のタイプの非行にくらべ、Y 3タイプの不良的非行の形成に大きく関与する。細かく見ると若干の性別差異がある。男性にくらべ女性群は X_{17} の逸脱的自己概念、 X_{13} の人生関与の薄さ、 X_{14} の健全な忙殺の欠如は非行を加速する。 X_{11} 、 X_{12} の愛着の弱化は男性において非行を増大させる。女性はこの変数は説明力が弱い。

各タイプ別の非行の形成には特徴的な変数がはたらくかどうか。全非行は他のタイプにくらべ説明に関与する変数が多いのが特徴であり、若干決定係数が大きい。法違反非行と不良的非行との比較では、男女とも不良的非行の方が説明変数が多く出現しており、またその内容の点では、ある種のストレイン、ある種のコントロールの弱化が特有である。レッテル化非行に説明力を持つ変数は比較的少なく、不良との接触模倣と逸脱的自己概念の2個が主である。それでも決定係数は低くなく、つまり2個程度でかなり説明できる。

上位校群と下位校群の間に重回帰分析の結果に関し違いがあるか、どうか。下位校の方が有意な変数が多く選ばれていて、若干決定係数が高まっている。ということは、ここで取りあげた18個の説明変数は非行原因論で通常扱われている要因からとられているが、それ自体、少しばかり下位校向きになっているのかもしれない。とくに下位校の女生徒サンプルに対するY3の分析では比較的多くの変数が有意に選ばれて、重相関係数は0.706と高くなったのが注目される。この試行のとくに有力な変数は、不良との接触模倣を筆頭に人生関与と中和の観念であるのは他の試行には見られない点である。上位も下位校も不良交遊が非行の最有力な要因であり、次に X_{17} 、 X_9 あたりである。 X_{17} の中和の観念は下位校群に目立つ変数にみえるが、そのほかは上位と下位校群に大きな違いは認められない。

D. 7個の変数による第2次重回帰分析

表 8 第 2 次重回帰分析の結果の要約

試行 説明変数	男性				女性			
	全サンプル				全サンプル			
	Y 1	Y 2	Y 3	Y 4	Y 1	Y 2	Y 3	Y 4
nX ₁ (社会的学習 I)	.059 (.103)	.069 (.087)		.090 (.046)	.090 (.180)	.061 (.063)	.083 (.240)	.085 (.043)
nX ₂ (ストレイン)			.054 (.090)	.090 (.030)	.111 (.063)		.095 (.078)	.074 (.009)
nX ₃ (中和理論)	.139 (.207)	.128 (.138)	.126 (.250)	.103 (.043)	.156 (.196)		.183 (.338)	
nX ₄ (コントロール I)	-.112 (-.115)	-.069 (-.051)	-.090 (-.124)	-.105 (-.029)	-.100 (-.049)	-.125 (-.031)	-.095 (-.067)	-.103 (-.010)
nX ₅ (コントロール II)	.048 (.076)							
nX ₆ (社会的学習 II)	.368 (.554)	.294 (.320)	.362 (.730)	.356 (.154)	.334 (.269)	.355 (.147)	.327 (.381)	.390 (.081)
nX ₇ (レイベリング)	.267 (.487)	.271 (.356)	.222 (.542)	× ×	.191 (.176)	.176 (.083)	.193 (.257)	× ×
重相関係数 R	.675	.598	.634	.522	.662	.532	.659	.473
調整決定係数 Adj. R ²	.455	.357	.403	.272	.438	.283	.434	.224
F値	146.2	116.9	141.6	59.9	135.2	102.8	133.0	47.5
p>F	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001	.0001

注, 1. 説明変数に与えられた数値のうち, 上段は標準偏回帰係数, () は偏回帰係数である。

2. ×は重回帰分析のとき説明変数に組み込まれなかったことを意味する。

3. 空欄は, 5%の有意水準に達しなかったので最終の有効変数セットから削除されたことを意味する。

18個の変数を, 表 2 に示したように 7 個に圧縮して再び減少法で重回帰分析を行った。2 次では男女, 全サンプルを対象として 4 タイプの非行別に試行した。結果の要約を表 8 に示す。F 検定の結果ではすべての試行において偏回帰係数は全部がゼロということではなく, 重回帰分析は十分に成立する。一試行あたり 4 個から 6 個の変数が有意に選択される。女性サンプルの Y4 ケースを除いて重相関は第 1 次の場合と同程度に高いから, 説明の精度は十分であると思われる。

先ず, 標準偏回帰係数に注目し, 各タイプの非行ごとに諸変数の説明力の大きさを比較する。説明要因, つまり原因としてもっとも有力なのは全試行を通して nX6, 社会的学習理論 II の変数であり (とくに女性において), 次

に有力なのはレイベリング理論の変数である（とくに男性において）。さらに中和理論の変数もかなりの数値を示し（とくに女性のY 3, 男性のY 2において）、社会的コントロール理論Ⅰ（親への愛着以外のボンド要素）、社会的学習理論Ⅰ（小学時の非行の自己報告）の変数が続く。親への愛着は皆が持っており、非行に走るか否かを決定する因子とはならない。小学時の非行歴は、それがために「悪仲間」からの非行的学習を推測させる意味で社会的学習理論を意味するが、男生徒の不良的非行以外の非行要因として無視できない値である。英米の多くの、例えばケンブリッジの長期追跡研究では非行体験は後年の再非行の予測の有力因子となる。意外であるのはストレイン（欲求不満－緊張）理論と社会的コントロール理論Ⅱの変数が説明力が高くないことである。7個すべての理論が非行の説明変数として等しく重要であるべきだという期待はあろうが、分析結果のうえでは説明力の序列がつく。

ところで今回の結果を読む場合、研究方法論、データの性質について知っておく必要がある。高校生非行に対して、ある理論の説明力が低いと出ても、最終の結論であると言えない。高校の2あるいは3年生をある年に調査して得たデータを分析したのみで、つまり時間は切片である。これに対して、長期追跡的研究の成果が英米では出始めている。この方法では、同一人のサンプルを小学低学年時から10年、20年と追跡し、その間、非行の開始、活発化、終息を記録し、一方、背景調査を節目で逐一実施してデータを蓄積する。かくして非行の変動と心身、身辺環境などの背景の変動との両者関係が、長期にわたる人間発達過程のなかでの因果関係として分析可能となる。ある理論変数は低学年の非行開始に有効に働らくとされ、別の理論変数は活発化に効き、別の変数は後期青年期の非行開始に有効といった具合である。英米では長期追跡研究⁽⁵⁾の成果が学界に出てきているが、わが国にはこの種の本格研究はいまだ皆無である。

今度は括弧内の偏回帰係数の数値に注目する。各試行間で社会的学習Ⅱの変数は男女ともY 3の不良的非行の説明においてもっとも強力であり、Y 2の法違反非行に対しては説明力を落とす。以上、第1次の、18変数による分

析にくらべ、7変数の分析結果はより明快、簡明である。

E. パス解析

現在の非行を説明するため2つのパスモデルを作成し男生徒サンプルを対象として分析を行った。使用した説明変数は第2次の重回帰分析のと同じ7個である。従属変数は全非行である。パス解析では、OLSの重回帰分析と異なり、一応、複数の変数をつなぐ、何ステップかの因果の経路がモデルとしてあらかじめ設定されて、初めて解析が進行する。統計解析が因果の経路を発見し、計算してくれるわけではない。因果の経路は研究者が作っておけば、解析が経路の大きさを決めてくれる。変数配置に関し、一応のルールがないわけではない。それは、従属変数との単相関の高い説明変数ほど従属変数の近くにおかれること、社会構造的、生物学的変数は基礎的とみなされて、従属変数から遠いところにおかれること、時間的に過去のもほど従属変数から遠くにおかれること、隣接した変数間の相関が大きく、遠くにある変数との相関は小さくなるよう変数は時間段階的に配置されるべきことなどである。

そうとはいえ、犯罪の様々な原因的変数の因果配置が確定していない現状に鑑みれば、一つつつの説明変数をいくつかの因果経路を考えながらモデルに配置するのはたやすいことではなく、研究者のその場の裁量に大きく依存するだろうし、因果は一方向ではなく、双方向であるべきという思想もあるかもしれない。重回帰分析での有意な変数がパスモデルでも同じく有意となる面も否定できない。そうとはいえ、因果の経路がついた変数配置が図示されるのは人々の直感的理解をうながすメリットはあろう。図1、2に示す。

図1も2も、右手に全非行、最左手に社会的学習Ⅰ（小学時の非行歴）がおかれ、順次右へとストレイン、社会的学習Ⅱの配列となる。社会的学習Ⅱとレイベリングは非行の近くにおかれる。コントロール変数は図1と2では少しばかり配置を変えた。図1ではコントロールⅠは因果の矢は非行、社会的学習Ⅱ、中和に向かい、コントロールⅡはコントロールⅠへ向かう。図2ではコントロールⅠとコントロールⅡとは因果関係なく、単に相関がありとし、コントロールⅠは非行の原因となる設定は図1と同じとしたが、3つの

図1 第2次の変数によるパス解析の結果の要約：a 試行

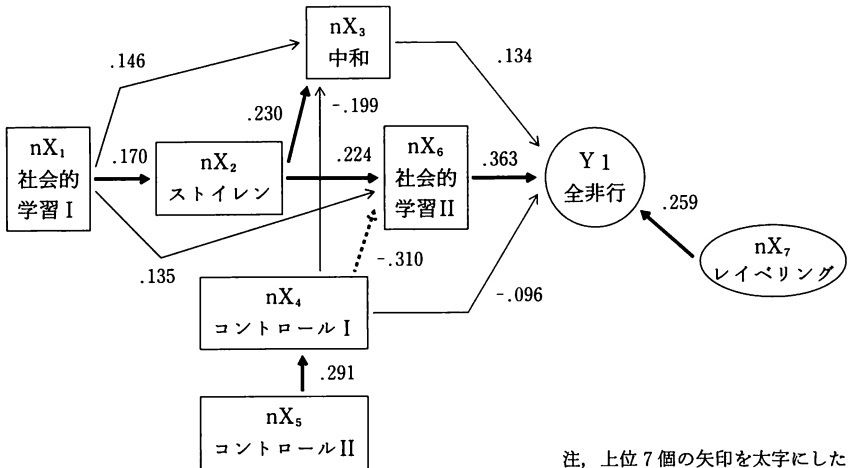


表9 相関の分解

説明変数	単相関 r	因果的相関			非因果的 効果 (r - e)
		直接 効果	間接 効果	全効果 e	
nX ₁	.220	.051	.107	.158	.062
nX ₂	.324	.031	.031	.062	.262
nX ₃	.384	.134	—	.134	.250
nX ₄	-.372	-.096	-.027	-.123	-.249
nX ₅	-.122	—	-.084	-.084	-.038
nX ₆	.591	.363	—	.363	.228
nX ₇	.517	.259	—	.259	.258

注, r は Y 1 に対する単相関である。

変数から原因的影響を受けるように変更した。

分析の結果は図のなかにパス係数の数値として示され、表9と10に相関を因果的と非因果的に、さらに因果的相関を直接効果と間接効果に分解した結果を示した。重回帰分析の結果を再確認することになるが、社会的学習IIとレイベリングは因果の大きな直接効果と非因果の効果を示した。コントロー

図2 第2次の変数によるパス解析の結果の要約：b 試行

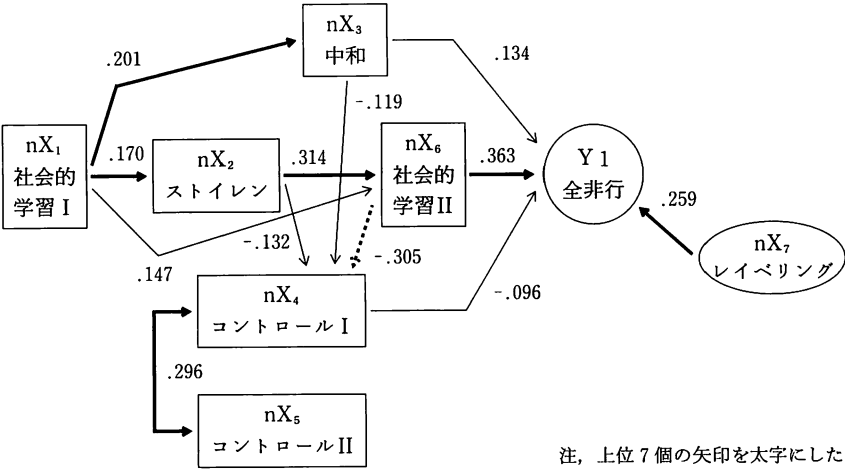


表10 相関の分解

説明変数	単相関 r	因果的相関			非因果的 効果 (r - e)
		直接 効果	間接 効果	全効果 e	
nX ₁	.220	.051	.115	.166	.054
nX ₂	.324	.031	.136	.167	.157
nX ₃	.384	.134	.011	.145	.239
nX ₄	-.372	-.096	—	-.096	-.276
nX ₅	-.122	—	—	—	-.122
nX ₆	.591	.363	.029	.392	.199
nX ₇	.517	.259		.259	.258

注, r は Y 1 に対する単相関である。

- 注, 1. 1%水準で有意なパス経路を掲載した。
2. 非行の測定は, 法違反と不良的非行を合体した全非行である。

ル I は因果の直接効果は大きくないが, 非因果的效果はかなり注目される。社会的学習 I とストイレンは非行に直接向かうパスは図に描かれていないが, 係数の値が1%水準に達しなかったためである。表 9, 10 には .051, .031 と記載されている。社会的学習 I は間接効果が大きいし (それはモデルの左手

に配置され、非行に直接向かうパス以外に、説明変数にもパスを出していることから推測できる）、ストレインは非因果的効果が大きい。

4. 要約

現今、犯罪学の所産として多くの犯罪理論が唱えられている。一つの理論で犯罪、非行を完全に説明することは困難である。そこでいくつかの理論の併用が考えられる。本論文は併用した場合の成功の程を数量的に実証しようとする。これを統合理論の試みというが、同時に本論文は英米に生まれた犯罪理論が文化の異なるわが国の非行に適用されて有効かどうかを見ることにもなる。男女高校生の自己報告非行が重回帰分析、パス解析により分析された。結果は、非行に対する説明力として社会的学習理論、レイベリング理論の強さが明らかになり、コントロール理論は弱いことが見出された。ただし、コントロール理論は非因果的効果はかなり認められた。

註

- (1) 成功という言葉自体はわが国の市民文化ではなじみが薄いですが、相当のお金をとる、仲間にくらべ相対的に地位が上がる、仲間の降格にたいし原級にとどまるなどを成功と考えれば、成功は身近な現象である。ただ、それを成功という言葉で表現しないだけである。
- (2) ボンドを多くの論文では絆と訳しているが、適切ではないと考える。絆は切っても切れない縁という意味が潜んでいる。一方、ハーシーのボンドは切れたり、強めたりできる可変的なものである。最近では訳さずにボンドをそのまま使うが、賛成できる。強いて訳せば、拘束子、縛りの要素というべきである。
- (3) デュルケーム、マートンのアノミー理論をストレイン（ストレスともいう）理論と呼ぶことがある。彼らは社会的仕組みの不備が特定階層の人々に圧力を及ぼして、緊張（ストレイン）をもたらし、その緊張を低下させ、適応するべく、場合によっては犯罪非行に訴えるのだと理論化した。この種のストレインは、社会構造的に来自る緊張である。近年、アグニューはストレスの医学的社会学やフラストレーション心理学をも参照し、ストレインの概念を拡張したとされる（Akers, 1997: 131-3, Curran and Renzetti, 1994: 173）。アグニューは一般ストレイン理論のなかで、種々なストレインに対する様々な適応のタイプを作り、適応が犯罪の形をとるか、とらないかは条件によるとした（Agnew, 1992）。これらの条件には、たとえば、別の目標の可能性、自尊の感情、課題解決技能、社会的支

援網、不良交遊、マクロな社会的条件などがある。人々が通常体験するストレインが自分個人の努力不足から来るか、社会的欠陥から来るか、両者から来るとするか、起源について見解は別れる。しかし学者が概念を定式化するときは学説史をふまえ、理論的根拠を必要とする。フラストレーション、ストレス、ストレイン、適応、対処行動 (coping)、防衛機制などの諸コンセプトは相互に関連しつつ学問領域のなかで発展してきた。限定的概念の拡張と一般化は壮大な試みだろうが、概念の迫力を失わせ霧散させる危険をはらむ。本調査ではストレインの起源は問うてない。

- (4) アメリカの非行研究の成果のなかではっきり言えることの一つは、青少年の非行行動はその人の友人の非行行動と密接に関連する点である。それを実証するリサーチは多数で、枚挙にいとまがない。アメリカと異なると言われる日本文化のなかでの非行の筆頭原因として、不良との交遊が今回抽出されたのは興味深い。エリオットとメナードは、「密接な関連」をさらに細かく追究すると3つの解釈があり、そこを解明するためには長期の長期追跡研究が必要であるとして自分らの研究結果を報告している。3つの解釈とは1. 個人の非行行動と非行的友人を持つこととは同じことの裏と表である、つまりこの立場では、非行とは外面に顕れた非行行動のみではなく、内面の非行的態度を含む非行潜勢力全体と考える。ゆえに非行的友人との交際自体が非行の不可欠部分なのである(ファールントン、ハーシー等)。2. 社会的学習理論の立場から非行的友人との接触が非行行動に導くと考える(エイカー、エリオット等)。3. 非行行動がきっかけでコントロールがゆるみ、非行的友人とつきあうようになる。これは社会的コントロール理論の立場からの説明である(グリュック、ハーシー等)。上述、1の解釈では2と3のような両者の因果関係は問題とされない(Elliott and Menard, 1996: 29)。彼等の調査結果による結論では、少年初期では第2の解釈が、つまり社会的学習理論が支持され、後期には第3の解釈、つまり高度の非行が高度の非行的友人を回りに集めるという。
- (5) 研究方法論としては長期追跡研究と呼ばれ、犯罪学の1分野としては発達犯罪学と呼ばれる。つまり発達犯罪学の主要な研究方法が長期追跡研究(longitudinal study)である(Loeber and Le Blanc, 1990: 455)。この方法では、児童-青少年期の身体的、人格的発達、性成熟、家庭・学校環境などの各側面の変動が記録され、データ化されるから、基盤となる犯罪理論は勢い統合的となる(Loeber and Le Blanc, 1990: 421)。なお発達犯罪学を概観するためにはAdvances in Criminological Theory Vol.6 (1995) が出ている。

文献

Adler, F., G. O. W. Mueller and W. S. Laufer 1995

Criminology. Second Edition. McGraw-Hill.

Agnew, R., and H. R. White 1992

Foundation for a general strain theory of crime and delinquency. Criminol-

ogy 30: 47-87.

Akers, R. L. 1997

Criminological Theories. Second Edition. Roxbury.

Brown, S. E., F.-A. Esbensen, and G. Geis 1991

Criminology. Anderson Publishing.

Curran, D. J. and C. M. Renzetti 1994

Theories of Crime. Allyn and Bacon.

Elliott, D. S. and S. Menard 1996

Delinquent Friends and Delinquent Behavior: Temporal and Developmental Patterns. In J. D. Hawkins (Ed.) Delinquency and Crime: Current Theories. 28-67, Cambridge University Press.

Ellis, L. 1988

Neurohormonal Bases of Varying Tendencies to Learn Delinquent and Criminal Behavior. In Morris, E and Braukmann (eds.) Behavioral Approach to Crime and Delinquency. Plenum 499-518

Loeber, R. and M. Le Blanc 1990

Toward a Developmental Criminology. In Tonry, M. and N. Morris(Eds.) Crime and Justice: A Review of Research Vol.12, 375-473. Univ. Chicago Press.

なお, Advances in Criminological Theory vol.6 (Transaction Publishers, 1995) は Developmental Criminology を特集する。

Messner, S. F., M. D. Krohn and A. E. Liska (eds.) 1989

Theoretical Integration in the Study of Deviance and Crime: Problems and Prospects. State University of New York Press.

Siegel, L. 1992

Criminology. Fourth Edition. West.

Thornberry, T. P. (ed.) 1995

Developmental Theories of Crime and Delinquency. In Advances in Criminological Theory. Vol.6, Transaction.

以下, パス解析の若干の文献

Duncan, O. D. 1996

Path analysis: sociological examples. American Journal of Sociology 72: 1, 1-16.

Edwards, W. J. 1992

Predicting juvenile delinquency: A review of correlates and a confirmation by recent research based on an integrated theoretical model. Justice Quarterly 9: 4, 553-83.

Empey, LM. T. and S. G. Lubeck 1971

Explaining Delinquency: Construction, Test, and Reformulation of a Soci-

ological Theory. Lexington Books.

Eve, R. A. 1978

A study of the efficacy and interactions of several theories for explaining rebelliousness among high school students. *Journal of Criminal Law and Criminology* 69: 1, 115-25.

清永賢二 1989

非行少年の再非行化過程の追跡研究. 西村春夫編集代表 1975～1988少年非行—その実態・原因・対応の分析. ソフトサイエンス社

Krohn, M. D., W. F. Skinner, J. L. Massey and R. L. Akers 1985

Social learning theory and adolescent cigarette smoking: A longitudinal study. *Social Problems* 32: 5, 455-71.

LaGrange, R. L., H. R. White 1985

Age Differences in Delinquency: A test of theory. *Criminology* 23: 1, 19-46.